考えるシウカ

第六十五回　『タイムマシンに乗れないぼくたち』と考える地獄

弦楽器イルカ⇔友人

目次

第六十五回『タイムマシンに乗れないぼくたち』と考える地獄〜**G** から **U** へ〜　1

第六十五回『タイムマシンに乗れないぼくたち』と考える地獄〜G から U へ〜

「リアル二刀流」ってコピー、最近言わなくなってきたけど、俺は全然しっくりいってない。
「リアルはフィクションより奇なり」って意味を含ませてると思うけど、例えば「リアル星飛雄馬」「リアルドカベン」とかとは違って、二刀流が固有名詞じゃないのは結局、フィクションでも二刀流のキャラなんてあんま思いつかないってことじゃん。
　確かに、メジャー出始めはまだわかるとしても、もう現実に定着してきてるんだから、早々に引っ込めてほしかった。二刀流もちょっとダサいし。
　ってかリアルって使うなら、彼がやってるのは（良くも悪くも）全員野球の対極だから、「リアル一人野球」の方が俺はまだしっくりくるよ。

　さて、俺が前回書いたフィクションが逆流してリアルに流れ込んでるって、気味の悪いマウント取って良い？
「世界の金持ちが望んでるのは、世界を西側と東側に分断して、卵を潰し合わせて儲けることでした。最終的には全員が疲弊すれば、残った人類でもう一度グレートリセットします。西側についた諸国は、今まで加害者だった側ではなく今度は被害者側として世界の金持ちに狙われてるって気付くときには、もう死んでいました」
　全然面白くはないし、くだらないフィクションだけどね。

　あと、宗教右派の話もかなり前の「ネトウハ♡」の時に分けて細かく書いたからいちいち繰り返さないけど、国内の右左の対立も、日韓の右派の争いも、ただ人と金が集まるようにプロレスを仕組まれてるだけだ。
　両国の「ネトウハ♡」を同じ宗教右派が主導して、争いをコントロールしてる。
　右派政治家はその宗教右派とつながっておけば、自動的に「ネトウハ♡」の人と金が集まってくるし、宗教右派に争いを管理させとけば「ネトウハ♡」が暴走して戦争に発展するようなリスクも避けられるから、便利だ。
　だから右派の金持ち権力者は、宗教右派が国民の金をむしり取って国外に流出させようが、自己の利権さえ守れればそれでいい。「ネトウハ♡」が日頃罵ってる売国奴ってまさに自分自身のことだが、それはスポーツ観戦と同じただのヤジ合戦ビジネスだから、

宗教右派を切り捨てる動きもない。見たくない部分はマスクして隠せば、脳が勝手に美化して気持ちよくしてくれる。
　この国は長いことそうやって、自国の富を海外に切り売りして現在に至ってる。
　それだけの話だ。

　旧政権を支持してた保守層は、新しい現政権を意外なほど批判してたのに、国葬を人質に取られた途端、「新政権万歳！」ってコロッと簡単に騙されてる。
　そんなムシ考だから、宗教右派に簡単に付け込まれるだろう。ってか、右左の争いをダシに権力者が利権を確保してる間に、この国はどんどん弱体化してると俺は思う。
　右派の金持ち権力者は結局、国家主権を取り戻すとか甘言を弄して、集めた人と金で自己の利権を保守したいだけだ。そして、右派の信仰が気持ちよくて騙されたい信者は、「考えない天国」を夢見たつもりが「考えない地獄」に転落していくと俺は思う。
　だって「考えない天国」なんて全体主義は、元からないからさ。
　ウマシカな俺は、どうせ同じ地獄なら「考える地獄」の個人主義を選びたいかな。

　でも、これだけは書いとくよ。これも新しいフィクションね。
「強者が弱者に転落する可能性は、決して高くはないかもしれません。強者は強者のまま一生を終える可能性の方が、きっと高いのでしょう。
　しかし弱者にはならずとも、強者が明日、被害者になる可能性はあるはずです。
　被害者を無視する強者は、明日自分が狙われて被害者になった時、それは自分が被害者を無視したからだと気づくでしょう。
　逆にもし、あなたが被害者に手を差し伸べれば、助けられた被害者はいつか、あなたを助けに来てくれるかもしれません」

　今からでも、福島で小児甲状腺の手術をした被害児童や、自分が背中を押して戦場に行かせた兵士を想像して手を差し伸べれば、いつか回り回って自分自身を助けることになるかもしれないと思うよ。
　被害者を無視する人間は、自分が被害者になった時、同じように無視されても当然だ。「まさか自分に限って被害者になるはずがない。いつまでも加害者側でいられるだろう」なんて、ムシのいいムシ考が一生通じるワケがない。情けは人の為ならず。

　この流れで書くのもなんだけど、前から書きたいことあって。
「もっと評価されるべき審議会」って番組が少し前にあったんだけど。
　俺としては、「寺地はるな」って作家の小説がもっと評価されるべきだと思った。４、５冊読んだけど、思わせぶりな違和感がなくて、すごく良い。
　まだ『ノルウェイの森』が出る前の村上春樹くらい評価されてないから、もっと評価された方がいいと思うし、そのうちきっと何作か映画化もされると思う。今が買いだね。

比べるのは申し訳ないけど、今村夏子は読者にわざと「読んで損した感」を植え付けようとしてる気がするけど、寺地はるなは読者にさりげなく、この世界のろくでもなさが煌めきを放つ瞬間を提示してる気がするよ。

親ガチャ（流行に乗ってみました）がうまくいかなかった読者には、余計来る部分があるのかもしれない。もしピンと来なかったら、きっとその読者は幸福な人生なんだろうなってちょっと思うよ。それはそれでいいことだと思う。

あと、二年前くらいの M-1 で、電車が揺れて立ってられないってグラグラ揺れるネタ、俺ももう忘れかけてるのに今更どうかと思うけど、あれが優勝する文化は正直、悲しくなるほど深みがないと思う（個人批判じゃなくて、この国の文化レベルの話ね）。

だったらせめて、「痴漢と間違われるかもしれないというプレッシャーで、膝が震えて電車に立っていられない」「冤罪を恐れるあまり、より痴漢のような動きをしてしまう」くらいの、もう少し深みのある心理をネタにしてほしかった。とにかく単純すぎた。

今回はこんな感じ。

どうかな？

考えるウマシカ～第六十五回　『タイムマシンに乗れないぼくたち』と考える地獄～

著　　弦楽器イルカ

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社